

総編集 水谷周 協力 樋口美作

# イスラーム信仰叢書 全10巻

本叢書の特長 画期的な新機軸

- ① イスラームを日本社会の中から、そして日本人の眼で論じていること。従来は欧米発の傾向が多く見られた。
- ② イスラームを宗教信仰として正面から捉えていること。従来は、法学や神学の集積であり、学問的な産物として捉えられがちであった。
- ③ イスラームに独特の文化的啓蒙の役割、さらには日本における信仰心復活の契機となるなど、建設的な役割を期待する。

特におすすめる方々

イスラーム信仰者  
高等学校図書館、大学図書館、市町村立図書館、文学部、東洋史学・東洋思想・宗教学研究室、中東・宗教科関係学会会員、中東進出本邦企業。

〔体裁〕四六判 上製カバー装

〔予価〕本体2800円〜3200円

2010年4月より隔月刊



### 編集関係者紹介(五十音順)

ムハンマド・ビン・ハサン・アルジール  
一九五三年サウジアラビア生まれ。カイロ大学文学博士号、イマーム大学教授(アラビア語アラブ文学)、前アラブイスラーム学院長。

飯森 嘉助(いもり かすけ)  
アズハル大学卒。拓殖大学名誉教授。日本に初めてモロヘイヤを紹介。共訳『日訳サヒーフムスリム』(日本ムスリム協会)、著書『アラビア文学の書き方・綴り方』(泰流社) 他。

河田 尚子(かわた なおこ)  
イスラーム史を研究。聖トマス大学非常勤講師。世界宗教者平和会議日本委員会婦人部会役員。日本人ムスリマのための勉強会「アマーナ」代表。著書『日本人女性信徒が語るイスラーム案内』(つくばね舎)。

徳永 里砂(とくなが りさ)  
カイロ大学考古学部留学を経て、慶應義塾大学博士課程修了(二〇〇五年)、アラビア考古学・碑文学専攻。アラブイスラーム学院所属。

樋口 美作(ひぐち みまさか)  
日本ムスリム協会名誉会長。世界連邦日本宗教委員会顧問。世界宗教者平和会議日本委員会監事。サイバー大学世界遺産学部客員教授。早稲田大学イスラーム科学研究所客員研究員。著書『日本人ムスリムとして生きる』、共著『教習』(佼成出版社)。

水谷 周(みずたに まこと)  
イスラーム研究者。京都大学文学部卒、米国ユタ大学博士課程在籍。アラブイスラーム学院所属。日本にもなじみやすいイスラーム信仰の紹介と、それを通じる信仰心の蘇生を目指す。訳著『アフマド・アミン自伝』(第三書館)、著書『イスラーム信仰とアッラー』(知泉書館) 他。

# イスラーム信仰叢書

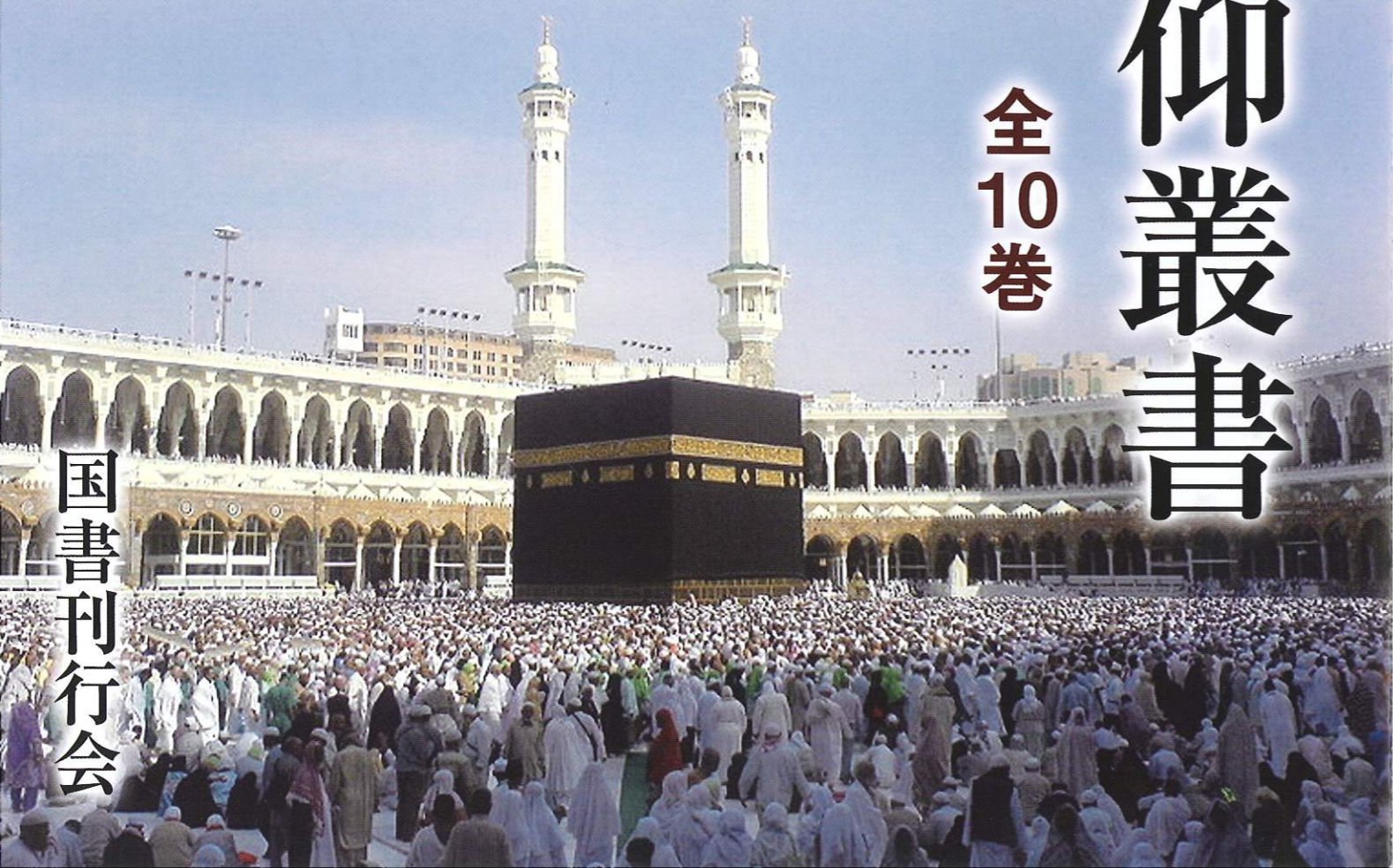
総編集 水谷周 協力 樋口美作 全10巻

イスラームの本質が

信仰の世界であることはあまりに当然である。

この事実を正面から把握し、納得するためには、

その素材がもつと豊富に提供される必要があるだろう。



国書刊行会

お名前

ご住所

お電話

イスラーム信仰叢書 全10巻	1	イスラーム巡礼のすべて	978-4-336-05204-9	冊
	2	イスラームの天国	978-4-336-05205-6	冊
	3	イスラームの預言者物語	978-4-336-05206-3	冊
	4	イスラームの原点—カアバ聖殿	978-4-336-05207-0	冊
	5	イスラーム建築の心—マスジド	978-4-336-05208-7	冊
	6	イスラームと日本人	978-4-336-05209-4	冊
	7	イスラームと女性	978-4-336-05210-0	冊
	8	イスラーム成立前の諸宗教	978-4-336-05211-7	冊
	9	イスラーム現代思想の継承と発展	978-4-336-05212-4	冊
	10	イスラーム信仰と現代社会	978-4-336-05213-1	冊

取扱店

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村1-13-15 TEL03(5970)7421 FAX03(5970)7427  
http://www.kokusho.co.jp e-mail:sales@kokusho.co.jp



## 発刊にあたって

日本では、イスラームは、今なお一般に理解されにくい。その一因は、時事的に注目されがちだということがある。また、教義、儀礼などが、学問的な知的産物として紹介されがちだということでもある。

しかし、イスラームの本質は、そのいづれでもない。それは信仰の世界であることはあまりに当然である。

## 推薦の言葉

本叢書の出現は画期的な企てである

板垣雄三 (東京大学名誉教授・東京経済大学名誉教授、社団法人日本イスラーム協会元理事長、「日本とイスラーム世界との文明対話」世話人)

仏教・神道・キリスト教など諸宗教については、おのこの立場からする研究や紹介が広くおこなわれてきた日本で、イスラームというと、外部からの「客観的」観察・解釈や欧米流の悪意ないし偏見をなぞる批評がやたらと目立っていた。有賀文八郎(一八六八―一九四〇)、田中逸平(一八八二―一九三四)ら先覚者にはじまり現在におよぶ日本人信者たちの主体的な知の営みを新しい次元へと高め、その成果を公共空間に提供しようとする本叢書の出現は、画期的な企てである。本叢書が第II期・第III期へと歩みを止めることなく、イスラーム信仰に支えられた知識の体系を読者に示し、その滋養で日本社会を豊かに潤すよう、つよく期待する。

日本社会がまさに必要としていた

片倉もとこ (国際日本文化研究センター前所長・名誉教授、国立民族学博物館名誉教授、21世紀イスラーム代表)

いまだにイスラームについての誤解や偏見が蔓延しているようですが、イスラームは日本でも世界でも若年知識層を中心に急速にひろがりつつあります。日本の近隣アジア地域に最大多数のイスラーム教徒が存在し、日本人はアジア人のひとりとしても、イスラームについて、その内面からの理解がもとめられています。精神性や靈性に人びとの目がむけられはじめた流れのなかで、こういう叢書の刊行は期待されていたものです。

日本人ムスリムが信仰体験を通して執筆した書

杉谷義純 (天正大学理事長、前世界宗教者平和会議日本委員会事務総長)

日本の宗教者とイスラーム指導者との対話は、ここ四〇年間にわたって継続し相互理解の道を歩んでいる。このたび日本人ムスリムが信仰体験を通して執筆した書を叢書として刊行されることは、また新たな対話の形とも言えるもので意義深く、大いに期待されることである。

イスラーム各国と関係ある各界の参考になるものと確信

林 昂 (日本ムスリム協会最高顧問、中東協力センター理事、元アラビア石油専務取締役、元大阪外語大教授、京大文学部講師)

太平洋戦争後の醜い食料難から、やむなく学窓から実業界へ転身を余儀なくされた私は、幸いにも中東アフリカ諸国とわが国初の大規模工業製品の輸出、金融逼迫に苦しむわが国への初のオイルマネーの導入に成功など、数多くの実績を積むことが出来た。これも一重に各国の為政者とムスリムとして真心を通わすことが出来たのが大きな要因と思います。この度、畏敬する学友、水谷周君が真摯且つ旺盛な研究心をもって、ものされた本叢書、中でも巻10『イスラーム信仰と現代社会』は、イスラーム各国と係わりを持つ我が国各界の方々に大いに参考になるものと確信します。

真にイスラームを理解するために不可欠

吉村作治 (サイバー大学学長、早稲田大学客員教授)

このような大書が日本でもいよいよ出版される時がきたのだなあとというのがまず私の感想です。私は四〇年以上イスラームに接してきましたので、本書の構成をみた時、とても興味をひかれました。そしてこれこそ真にイスラームを理解するために不可欠なものです。一人でも多くの方に読んでいただきたいものです。

この事実を正面から把握し、納得するためには、その素材がもっと豊富に提供される必要があるだろう。現在までのところ、このような視点と意識の下での出版物は極めて僅少である。この空白を埋めるために、刊行の必要性が高いと思われる内容を、選択・構成した。

## 各巻概要

### 1 『イスラーム巡礼のすべて』

水谷周著

三〇〇万人を集める巡礼はイスラーム最大の行事であり、一生に一度は果たさなければならぬ信者の義務である。大群衆がカアバ聖殿を回るシーンは知られている。この巡礼の歴史、儀礼、そしてその歓喜という精神面などを総合的に扱った、わが国初の本格的解説書である。

### 2 『イスラームの天国』

水谷周 訳著

イスラームの人生観は、最後の日の審判にどう臨むか、その日に備えただけ善行を積みむかということに尽きる。アッラーに認められて、天国行きとなるか地獄行きとなるかが問題なのである。本書ではその天国の様を描いたことで知られる古典を翻訳し、注釈を付した。(アルジャズイーヤ原著)

### 3 『イスラームの預言者物語』

アルジール選著／水谷周・サラマサルワ 訳

預言者ムハンマドはアッラーの使徒として啓示を伝えたことを証言して認めることから、人々はイスラームに入信することになる。その預言者の人となりや、ムスリムにとっていかに敬愛すべき存在かを、アラブ・ムスリム自身の言葉で綴っており、生の声を聞く貴重な機会である。

### 4 『イスラームの原点―カアバ聖殿』

水谷周 著

イスラームの礼拝の方向は、カアバ聖殿である。その歴史は、人類の祖アダムに遡るとされる。またそこは毎年の巡礼の目指すところでもある。秘儀に満ちたこのカアバ聖殿の歴史と種々の事跡について、わが国で初めて、アラビア語文献を渉猟しつつ執筆。

### 5 『イスラーム建築の心―マスジド』

水谷周 著

イスラーム建築の粋は礼拝所であるマスジドである。モスクと欧米語では呼ばれる。いかに豪華、壮大、多様であっても、それに眼を奪われてはならない。なぜならば、その中核的な心は、礼拝における誠実さ、忍耐、愛情、禁欲、悔悟などの徳目に力点が置かれるからである。

### 6 『イスラームと日本人』

飯森嘉助 編著

イスラームは日本人にとって、どのような意味を持ちうるのか。戦後日本で拠り所のなくなつた信仰心を蘇生させるような、大きな役割も期待できるのか。このような観点からイスラームと日本人の接点を回顧し、さらに今後の可能性と問題を本書は一望のもとにまとめている。(飯森嘉助、片山廣、最首公司、鈴木絃司、樋口美作、水谷周)

### 7 『イスラームと女性』

河田尚子 編著

イスラームにおける女性の立場は、とかく論議を呼びがちだが、本来の教えではしきりに男女平等が唱えられている。何が問題となるのか、それは欧米から見ての指摘に過ぎないのか。これらに関して教えの基本に戻って論じる。(河田尚子、水谷周、金山佐保、齊藤力二郎、前野直樹、永井彰、松山洋平・朋子、リーム・アハマト)

### 8 『イスラーム成立前の諸宗教』

徳永里砂 訳著

イスラームの登場した紀元七世紀以前のアラビア半島の宗教状況は従来ほとんど知られていない。それにメスを入れることは、イスラームがどれほど人類救済の教えとして広まったのかについての認識を新たにするものでもある。本書はわが国で初めて本格的にこのテーマに取り組んでいる。(徳永里砂、アブドゥル・ラティーフ)

### 9 『イスラーム現代思想の継承と発展』

水谷周 著

イスラームの現代における政治、社会思想は、どのように継承され、発展させられているのか。著名な学者父子の思想的な関係を通じて、極めて実証的に側面を検証し、広くはアラブ・ムスリム社会における家族関係の重要性への示唆も与える。

### 10 『イスラーム信仰と現代社会』

水谷周 編著

現代社会を取り巻く諸問題が多岐にわたることは言うまでもない。政治、経済、そして安楽死や臓器移植などの社会面の問題は信仰に対する挑戦でもある。それらをイスラーム信仰の立場から、どのように捉え対応しようとしているのかについて答える。(奥田敦、四戸潤弥、水谷周 他)

(内容の一部が変更になる場合もあります。)